

株式会社船場
SEMBA CORPORATION

1947年創業。空間創造における調査・企画から、デザイン・設計、制作・施工、演出まで、年間4,000件のプロジェクトを国内外で手がける。写真左：野島 滉氏、右：大倉佑介氏

商環境やオフィスの内装デザインを手がける 船場のRevit×Enscape活用事例

軽やかなBIM推進を支える ノートPC「DAIV」

商空間をはじめとした多様な空間づくりを手がける株式会社船場では、2019年よりBIM推進を開始し、現在では年間約200件ものプロジェクトでRevitとEnscapeを活用している。本記事では、船場 BIM CONNECT本部の大倉佑介氏と野島 滉氏の2名を迎え、BIM推進の現在地と、推進を支えるマウスコンピューターのクリエイター向けノートPC「DAIV」の活用状況について聞いた。

TEXT__kagaya (ハリんち)



ロックダウンや半導体不足の影響で、PCの納品は7～8ヶ月待ち、というケースも多かったなか、マウスコンピューターは国内製造のため「1週間で納品可能です」とスピーディに対応してくれました。

——毎年、導入台数も増えているそうですね。

大倉：船場では毎年20～30人ほどを対象に独自の内装BIM教育を実施してきました。BIMを活用できるメンバーの増加に伴い、DAIVの導入台数も、2022年の5台からスタートし、23年に25台、24年に20台、そして25年には40台と増加してきています。

BIM推進に伴って導入された クリエイターを重圧から解放する ノートPC「DAIV」

——まずは船場のBIM推進についてお聞かせください。

大倉佑介氏（以下、大倉）：2019年、生産性向上や新たな価値創出を主な目的としてBIM推進室を立ち上げました。社内でこの取り組みを推進していくための切り口として、内装のビジュアライゼーションに目を向け、早い段階でEnscapeを導入しました。内装は建築に比べて仕上げる材料が多く、かつ設計変更が頻繁に発生します。しかし2Dの図面と少数のCGパースだけでは、関係者全員が完成形を正確にイメージするのは困難で、オープン後に「想像とちがう」という課題がありまし

た。RevitとEnscapeを連携させてリアルタイムで空間をビジュアライズしていくことで、クライアントをはじめとする関係者間でのコミュニケーションが非常にスムーズになりました。現在では、飲食店、物販店、大型商業施設、ホテル、オフィスなど、年間約200件のプロジェクトで活用しています。

——社内への普及が進む中、ハードウェア環境にも変化がありましたか？

大倉：BIMを推進し始めた2019年当時はデスクトップPCも使用していましたが、コロナ禍による在宅勤務への移行や、クライアント先・現場への持ち出しが増えたことで、ノートPCへの完全移行が決まりました。ただ、当時使用していたノートPCは非常に重かったので、2022年に軽量かつ高性能なマウスコンピューターの「DAIV」を選定しました。納期も選定の決め手になりましたね。当時は

RevitとEnscapeが快適に 駆動するGeForce RTX 4070 Laptop GPUと32GBメモリ

——PC選定にあたって重視されたスペックを教えてください。

大倉：RevitとEnscapeを快適に稼働させるためには、GPU性能が最も重要です。現在はGeForce RTX 4070 Laptop GPUを標準としています。また、メモリに関しては32GBが必須です。16GBでは、大規模なプロジェクトを開いた際に処理が追いつかず、実業務に支障が出てしまいます。

——Enscapeではこういった場面で負荷が高くなりますか？

野島 滉氏（以下、野島）：やはり空間の規模が

大きい商業施設などはデータが重くなります。また、内装特有の事情として、間接照明や複雑なマテリアルのテクスチャ、そして植栽などの細かなオブジェクトを大量に配置するため、ポリゴン数や光の計算負荷が跳ね上がります。**大倉**：そうした重いデータをスムーズに扱うためにも、GeForce RTX 4070と32GBメモリは欠かせない条件ですが、DAIVは標準構成でこのスペックを満たしており、カスタマイズによる納期の遅れを気にせず導入できるのが素晴らしいポイントです。

——実務上、DAIVのどのような点を評価されていますか？

野島：ディスプレイサイズが16型と大きめな点が非常に気に入っています。DAIVの場合、画面のベゼル（縁）も細いので没入感があります。**大倉**：そして何よりも“軽さ”です。本体重量が約1.60kgと軽量なのはもちろんですが、私たちにとって革命的だったのが、ACアダ

プタの小ささと軽さでした。GeForce RTX 4070を搭載するようなハイエンド機は、200W以上の巨大で重いACアダプタが付属しているケースが多いです。しかし、DAIVのACアダプタは薄型でコンパクトです。カバンに入れた際の総重量が軽くなったことで、持ち運びに対して挙がっていた「重くて大変」という社内の不満は解消されました。

——クライアントのオフィスにPCを持ち込むことも多いですね。

野島：はい、やはり打ち合わせの場では、DAIVのようなどんな空間にも馴染むスマートで落ち着いたデザインが扱いやすいですね。プレゼンテーションの主役はあくまでもデザインの提案。ノイズにならない点は重要です。

——船場の内装ビジュアライゼーション、今後はどのような発展を見据えていますか？

大倉：現在は主にクライアントとの合意形成やプレゼンツールとして機能しており、顧客

満足度の向上に大きく貢献しています。今後はさらに、ビジュアライゼーションそのものをクライアントにとって価値をもつコンテンツとして提供していきたいです。例えば、百貨店のリニューアルオープンの際には、工事期間に施主のSNSで完成予想のフルCGショート動画をながし、プロモーションとして活用いただいた実績があります。

野島：設計者自身がEnscapeを操作して「この角度が空間を一番美しく見せられる」とディスカッションしながら画づくりができるのは、BIMとリアルタイムレンダラを設計者が直接扱える環境があるからこそその強みです。

大倉：内装業界にこれまでなかった見せ方や、CGだからこそ可能な表現を追求していくことで、内装デザインの価値をより高めていける。そう考えています。今後もDAIVの高い処理能力と機動力を活用しつつ、内装BIMの可能性をさらに広げていくつもりです。

サラベス BASEGATE横浜関内店における内装ビジュアライゼーションの実例



A Enscapeによるレンダリング結果 **B** 竣工写真
C 「店内に点在する間接照明の表現や、カトラリーや植栽などのアイテムの多さによって、PCにもかなり負荷がかかります」（野島）
D Revitで作成したBIMモデル

船場 導入モデル DAIV Z6-I9G70SR-A

CPU	インテル® Core™ i9-13900H プロセッサー
GPU	GeForce RTX™ 4070 Laptop GPU
メモリ	32GB (16GB×2／デュアルチャネル)
パネル	16型 液晶パネル（ノングレア／sRGB比100％／Dolby Vision対応）

製品ページは
こちら

